

これからの英語教育とは
—足利市英語教育推進プロジェクト会議で考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

今朝の「開倫塾の時間」では、これからの英語教育をどのようにするかというお話をさせていただきます。私が住む栃木県足利市では、足利市教育委員会が「足利市英語教育推進プロジェクト会議」という会議を、昨年12月12日(月)から1か月か2か月に1回ぐらいの割合で開催しています。その第2回会議が2月16日(木)にありました。これは、足利市の英語教育をどのように進めたらよいかということ話し合う会議です。今年9月までに1か月か2か月ごとに会議を開き、2012年の年末までにこれからの英語教育をどのようにしたらよいかについての提言をまとめる予定です。ですから、とても大事な会議だと思います。

この会議の座長は、上智大学の教授でいらっしゃる吉田研作先生がお務めです。この方は日本の英語教育では第一人者の方だとお聞きしております。とても素晴らしい先生です。副座長は群馬県太田市にある群馬国際アカデミーの中学校と高等学校の校長先生でいらっしゃる小笠原敬三先生がお務めです。小笠原先生はその学校に勤めるまでは、群馬県の教育委員会の次長さんでした。その他には、経済産業省の局長をなさった方で教育改革の国民会議の事務局の代理をなさった先生や、東京都内の小学校の校長先生をなさった方で小学校の英語教育に最も熱心な先生と言われた先生、墨田区の教育委員会にいらっしゃって両国中学校で最も熱心な教育をされた校長先生を経験なさった方、慶應義塾大学の文学部の先生など、語学・学校教育・いろいろな教育改革の専門の先生をお招きして会議を開いています。地元からは足利市立山辺中学校の校長先生や、足利市の教育長さん、英語の先生を長年なさった大ベテランの方に入っています。そして、私も一人のメンバーとして参加させていただいています。

毎回2時間の会議は白熱しており、これからどのように足利市の英語教育を進めるか、その大きな枠組みを考えています。具体的にはどのようなことが話されているかといいますと、生徒の英語力を把握するためにはどうしたらよいか、聴く・話す・読む・書くを4つの技能といいます。英語を聴いて、英語を話して、英語を読んで、英語を書くという4つの技能の向上をどのように図ったらよいか、学習意欲を向上させるためにはどのような方法があるのか等々、生徒の英語力の向上について話し合っています。

また、英語の先生の能力強化も大事です。そこで、英語の先生の英語力・指導力の強化をどのように考えたらよいのか、グローバル社会を迎えてこれからの英語の先生に求められる英語力とは何か、英語の先生の英語力・指導力を強化するために研修が行われますが、その研修の効果的なあり方とは何か、英語の先生自身はどのように研修をしたらよいのか、つまり自己研修のあり方についても話し合われます。

それから、生徒が英語を習得する・活用できる環境の整備として大事なことの一つに、ALT(アシスタント・ラングウェッジ・ティーチャー)のしくみがあります。この分野では足利市は非常に進んでいて、全部の小学校に外国人の先生が配置され、恵まれた環境だと思います。その外国人の先生をお呼びして直接教わる ALT の試みをどのようにしたらよいか、その方々にどのように活躍していただくかについても話し合います。

その他には、ICT つまりコンピュータのシステムを使って効果的に英語を学び、活用できる環境を整備するにはどうしたらよいか、地域には英語ができる方がたくさんいらっしゃいますので、この地域人材をどのように活用したらよいか、このことも含めて国際共通語としての英語力の向上のために何をしたらよいのか、特に足利市の小学校の英語教育、中学校の英語教育、高等学校の英語教育、できれば大学・短大・専門学校の英語教育、さらには一般社会人の英語教育をうまく結びつけるような取り組みはできないだろうかといった内容についての議論もしています。それを今年中ずっとやって、年末ぐらいまでに提案をまとめるということになっています。

会議に出て私が一番感じたことは、英語教育で一番大切なことは英語の先生だということです。英語の先生が子どもたちをこのようにしようと使命感に燃えて教えれば、英語の力は必ずつきます。逆に、足利市にはあまり外国人の方がいらっしゃらないので、英語を勉強しても将来役に立つことはないだろう、だから先生は適当に教え、生徒は適当に習えばよいと先生が勝手に思い込んでおしまいです。子どもたちがこれから生きる 20 年後、30 年後は外国との交流がかなり盛んになって、外国人の方も日本にいらっしゃいますし、日本人の方も外国に出て行きます。いろいろな文書やコミュニケーションも英語でしなければならなくなります。そのときに備えて、また、中国の方や、インドの方、インドネシアの方など英語を母国語にしないアジアの方も本当に英語がうまいですから、それらの国の方々に負けないように英語の力をつけてあげなければいけない。そのように、英語の先生方が使命感に燃えて教えれば、素晴らしい教育ができます。しかし、この辺には外国人があまりいないから適当でいいやと考え始めると、英語教育は手抜きの極致になりますので、そのような英語教育だけは足利市ではしてもらいたくないと私は第 2 回目の会議で発言をさせていただきました。

「足利市英語教育推進プロジェクト会議」では、足利市の英語教育をどのようにするかという議論がとにかく熱心に行われています。学校で英語を何年学習しても英語が使えるようにならない日本の英語教育は、足利市だけではなく日本国中のすべての市や町の問題ですので、日本国中のすべての市や町でこのような会議が行われたほうがよいと思います。是非皆さんにも御関心をもっていただければありがたいと思います。

— 2012 年 10 月 3 日加筆・訂正、林明夫 —